



ま と め

本誌は、脳卒中・脊髄損傷・四肢麻痺・小児神経系を中心としたリハビリテーションの発展を促進することを目的として創刊された。本誌では、脳卒中・脊髄損傷・四肢麻痺・小児神経系を中心としたリハビリテーションの発展を促進することを目的として創刊された。

表 題

著 者 名

- 1) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 2) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 3) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 4) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 5) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 6) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 7) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 8) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 9) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 10) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 11) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 12) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 13) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 14) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 15) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 16) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 17) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 18) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 19) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 20) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.

本誌は、脳卒中・脊髄損傷・四肢麻痺・小児神経系を中心としたリハビリテーションの発展を促進することを目的として創刊された。本誌では、脳卒中・脊髄損傷・四肢麻痺・小児神経系を中心としたリハビリテーションの発展を促進することを目的として創刊された。

- 21) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 22) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 23) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 24) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 25) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 26) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 27) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 28) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 29) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 30) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 31) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 32) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 33) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 34) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 35) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 36) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 37) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 38) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 39) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.
- 40) 脳卒中後の言語障害の診断と治療 (田中 隆雄) 1987, 10, 100-105.

JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION 別 刷

第 巻・第 号: 年 月号

質的研究の基礎と考え方(1)

高木廣文

(東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室)

key words 質的研究, 現象学

はじめに

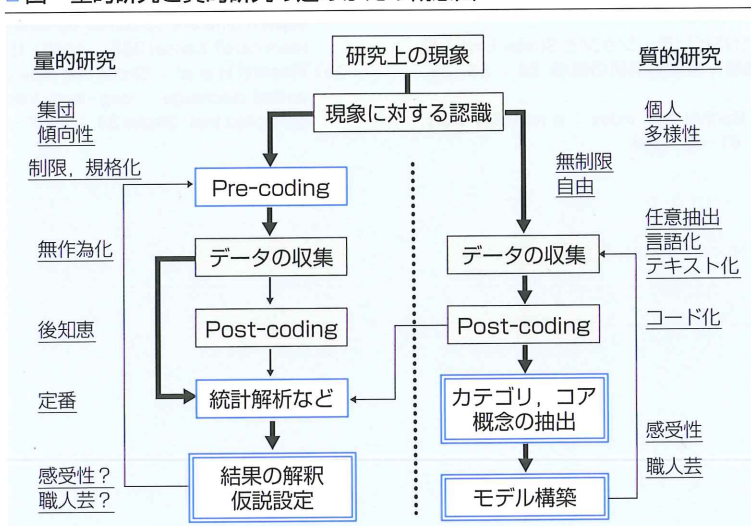
現在, 医療分野での代表的な研究方法といえば, 遺伝子や生化学的な動物実験であったり, 新薬の効果を調べるための無作為化比較試験であったりするのではないだろうか. このような研究の形態は科学的証拠(エビデンス)の水準が高いものと考えられており, 学術雑誌に投稿した場合に採用されやすいことから, ますますすかかんになるように考えられる. しかし, 一方では患者やその家族等の不安や葛藤等の心理的側面を扱う研究も少なくないし, 人間を対象とする限り決してなくな

ることはない研究領域であろう.

研究で扱うデータの質により, 測定され数値化されたデータを扱う研究は「量的研究」とよばれている. 一方, 患者へのインタビュー等から得られた言語データの解釈を主とする研究は「質的研究」とよばれている. 以下2回に分けて質的研究とはどのようなものであるのかを量的研究との比較を通じて説明し, さらにわれわれの世界に対する認識論をふまえて解説したい.

図に量的研究と質的研究の進めかたの概要を示した. 研究の大きな流れは, 量的であろうと質的であろうと, それほど大きく違うわけではない. しかし, まず両者には, 自分自身にとっての外部

■ 図 量的研究と質的研究の進めかたの概念図



世界と内部世界(心)についての認識の仕方に大きな違いがある。

■量的研究での世界の認識

臨床医学分野では、「エビデンス」に基づく治療が重視されている。このこと自体は当然のことであり、文句のつけようがないだろう。特定の疾患に用いる薬剤や治療方法が、科学的にその有効性が確認されていなければ、なんのために病院に行って治療を受けるのか、医療を受ける側からみればしごく当然のことである。

そのような Evidence-Based Medicine(科学的証拠に基づく医療, EBM)の水準は、研究デザイン、分析方法等により判断されている。すなわち、患者を無作為化して複数の治療法や処理を割り付けて行うような研究デザインに基づいた研究結果が、エビデンスとしてレベルの高いものとして扱われている。そしてデータ収集後の分析には統計学を用いることが必須となっている。

統計学を用いる第一の理由は、偶然による変動(ばらつき)を評価できるためである。統計学的検定では、帰無仮説とよばれる仮定のもとで、研究上で観察された現象が偶然生じる確率(有意確率)を求める。すなわち、有意確率とは、帰無仮説が正しい場合に、研究上得られたデータが偶然のみによって得られる確率を推定しているのだから、その確率の大小により帰無仮説を採択するか拒否するか意思決定ができる。

統計学では、可能な限りあらゆる現象を数量化する必要がある。各種の臨床検査値はもちろんのこと、患者の臨床的な症状や性格特性等、もともと「質」と考えられるものでも、「量」として把握できるように工夫をする。現象の数量化は、研究の客観性を高めるために不可欠なことである。なぜならば、数値で現象を記述し、推論を行うことの長所は、他の研究者がその結果について、再度調査し、自分の研究と比較することを容易にすることができる点にある。

このように、現在の医療分野では、統計学を用いる量的研究が主流となっている。もともと、量的研究においては事象の存在は当然のことであ

り、それぞれが要素に還元でき、かつそれが測定可能であると考えている。例えば、「糖尿病」という病気の存在は疑わないだろう。それに関係する「空腹時血糖」や「インスリン」も存在し、これらの値は「正しく」測定ができる血液を構成する要素であると考えているのだろう。

われわれは普通、物事の存在を疑ったりはしないものであり、研究上でも自分が対象とする現象が実在するののかということに疑問を抱いたりはないものである。ところが現在の哲学である「現象学」では、こういった物事の実在性を問題にせず、括弧に入れてしまう¹⁾。そういった世界認識の立場でみると、物事はかなり違ってみえてくる。池田(1998)は、「科学は同一性(構造や形式)の追求」であるとし、自分の意識や経験(内部世界)とは独立に存在している世界(外部世界)の実在性を仮定しなくても、科学は十分に成立すると主張している²⁾。次に、このような考えかたがより必要となる研究方法である質的研究について考えてみよう。

■質的研究での認識論

血液検査を行うのに、なにも世界をどのように認識しているのかは、大した問題ではない。また、血圧値、血糖値等が実際には何をどの程度正確に測っていようと、1つの有用な指標として考えれば、そういったものの実在をいちいち考える必要はないと考えるのが普通だろう。とはいえ、科学とは何かをもう少し考えてみよう。

池田(1988)は、物質と物質の関係として記述できる理論をもつ分野を、「厳密科学」として分類している³⁾。たとえば、ニュートン力学のように「力=質量×加速度」のように記述できれば厳密科学といえる。したがって、化学や生化学等も厳密科学である。一方、理論のなかに言説による記述が含まれるものは、非厳密科学ということになる。したがって、医学領域の大部分は非厳密科学ということになる。しかし、非厳密科学をすべて厳密科学のようにしなければならぬというわけではない。心理学や精神医学等は本質的に非厳密科学であり、研究方法も独自のものが用いられる

べきである。たとえば、なぜ必要な治療薬を飲まない患者がいるのかとか、手術後のリハビリテーションに熱心な患者と不熱心な患者がいるのはなぜか等という問いに答えるための研究は、要素還元的な記述を行うこと自体が不可能なのではないだろうか。

人間の心理に関することでも、なんとかそれを数量としてとらえて、厳密科学のように要素間の関係を調べようとする研究方法がある。たとえば、「QOL」、「不安」、「健康観」、「自己効力感」のような概念を定義し、それを適当な質問紙を使って「測定」という方法である。これは「尺度構成」とよばれる方法であり、心理学、看護学、社会学等の分野では広く用いられている⁴⁾。

尺度構成法により、実際には存在していない概念であっても、一面ではあるがあたかも実在物のように、その概念を扱えられるようになる。しかし、知能指数のように、現実には客観的な実在物ではない「知能」が、あたかも「正しく」客観的に測定されたかのように扱われているのではないだろうか。このような問題点への批判として、人間の心の内部世界に関する研究では、そのような数量化を行わず、言語に基づいた研究も広く行われている。さまざまな現象に関して、いたずらに数量化を試みるのではなく、患者の語る言葉や態度、生活様式等観察やインタビューに基づいた言語データをそのまま用いる方法が質的研究である。医療分野では看護学を中心として広く用いられ始めている。

実際には質的研究といっても極めて多様な考えかたがあり、研究方法もさまざまである⁵⁾。しかし、その共通する点として、質的研究者は「意味に対する関心をもつ」傾向があるといわれている^{6,7)}。すなわち、質的研究では量的研究とは異なり、因果関係を推論するのではなく、経験の質や経験同士の相互関係やその意味に関心をもつ傾向がある。特に、多くの質的研究では主に対象者から得られた言語データのもつ意味が問題となる。

質的研究で扱うデータは、絵、写真、音声、ビデオ等さまざまな方法で収集されるが、最終的にはすべて「言語」に変換されてテキストデータとして、解釈の対象となる。このため、われわれの

内部世界における認識と言語という問題を抜きにして、質的研究を考えることはできない。質的研究においてまず考えねばならないのは、「データにはどのような意味があるのか」ということである。

言語データを解釈するのは研究者であるが、対象者(情報提供者)は他人である。日常会話でさえ、われわれは「正しく」他者のいっていることを解釈しているといえるのだろうか。まず、データの収集方法が適切に行われていることが、極めて重要である。データ収集に関しては、主に面接法が用いられると思われるので、これについては他の文献を参考にされたい^{8,9)}。

言語データの解釈で問題となるのは、解釈する立場の研究者の解釈が情報提供者のいったことの意味内容と同一かということに尽きるだろう。スイスの言語学者で構造主義の創始者として知られるソシュールによれば、言語(ラング)は社会的なシステムであると同時に個々人の内部世界に構成されたシステムでもある。そして各語(シーニュ)は恣意的(根拠がないこと)で他の語と差しか意味がないように構成され、分離不可能な表現(シニフィアン)と内容(シニフィエ)からなっている¹⁰⁾。そして、あらゆる現象は言語によってはじめて認識が可能になると考えられる。

シーニュのもつ意味範囲は必ずしも確定したものではなく、ある主体への他者からの発話(パロール)と本人による認識・発話の繰り返しによって、ラングが個人の内部(つまり頭脳)に構成されていく。言語が恣意的であることは、日本語と英語を比べてみれば納得することであるが、その意味内容も必ずしも一致していない点が重要である。たとえば、「虹」という現象を構成する色は日本人は7色と考えているが、欧米人は6色であり、たった2色にしか区切られていない社会もある¹¹⁾。このように同じ現象でも、社会のもつ価値の影響を抜きにしては、言葉のもつ意味は正しく解釈できない。

われわれが、他者のいったことを正しく解釈していると判断する根拠はどこにあるのかは、質的研究においては極めて重要な問題である。研究者が情報提供者から得た言語情報を正しく解釈でき

ると考えるのは、結局のところ、「ある現象に関しての認識構造は両者で同一である」と仮定していることになるだろう。これは池田(1988)も指摘しているように、「同一のラングをもつ個人は、ラング以外の内部世界においても、同一構造をもつに違いない」等の平行性の原則を暗黙の前提としていることになる¹²⁾。この前提が成り立たないような場合、たとえば重度の認知症の患者や精神障害者を情報提供者とするような場合、得られた言語データの解釈は、通常の方法では解釈を誤る可能性が高くなるだろう¹³⁾。

現象学的社会学のひとつの立場である社会構成主義が、近年では重要視されてきている。社会構成主義は、一見、確固とした実在のように当事者に思われている事象を、社会的に形成されたものとしてとらえ、その過程を分析するという立場である¹⁴⁾。

上記のように質的研究は量的研究とは異なり、

因果関係を推論するのではなく、経験の質や経験同士の相互関係やその意味に関心をもつ傾向がある。また、質的研究は統計的な処理や数量化のためのほかの手段によっては到達しえない結果をもたらすような研究をすべて含むという考えかたもある¹⁵⁾。質的研究では、特定の個人の認識、態度、行為等の社会的な相互作用を問題にし、理論の探求や意味の探求を行うのが普通である^{6,15)}。

特定の理論の構築を目指さずに、関心のある現象の記述のみを行うことを目的とする立場もあるし、理論構築を目指す立場もある。実際にはある現象について、一般的理論(公式理論)を目指すのは、単独の研究だけではかなり困難である。通常は、ある条件下で有効な具体的理論を構築することを目的とするのが普通であろう。

このように、質的研究では特定の現象の記述から、一般理論の構築まで、その目的は広範に及んでいる。

(次号につづく)

文 献

- 1) 竹田青嗣：現代思想の冒険，筑摩書房，1992，pp 167-189.
- 2) 池田清彦：構造主義科学論の冒険，講談社，1998，p14.
- 3) 池田清彦：構造主義生物学とは何か，海鳴社，1988，p54.
- 4) 高木廣文，林 邦彦：尺度構成法—測れないものを測る方法について，*EBNursing* 4 (2)，210-215，2004
- 5) Flick U：Qualitative Forschung，Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH，1995 (小田博志・他訳：質的研究入門—<人間科学>のための方法論，春秋社，2002，p11)。
- 6) Willig C：Introducing Qualitative Research in Psychology：Adventures in Theory and Method，Open University Press，2001 (上淵 寿・他訳：心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて，培風館，2003，pp11-15)。
- 7) Cohen MZ et al：Hermeneutic Phenomenological Research，Sage Publications，Inc，2000 (大久保功子訳：解釈学的現象学による看護研究，日本看護協会出版会，2005，pp1-2)。
- 8) 高木廣文，林 邦彦：データを収集するための調査技法について，*EBNursing* 3 (1)，68-73，2003.
- 9) 戈木クレイグヒル滋子編：質的研究方法ゼミナール—グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ，医学書院，2005，pp21-69.
- 10) 丸山圭三郎：ソシユールの思想，岩波書店，1981，pp92-116.
- 11) 丸山圭三郎：ソシユールの思想，岩波書店，1981，pp118-119.
- 12) 池田清彦：構造主義生物学とは何か，海鳴社，1988，p93-94.
- 13) 立川健二，山田広昭：現代言語論 ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン，新曜社，1990，pp132-148.
- 14) Flick U：Qualitative Forschung，Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH，1995 (小田博志・他訳：質的研究入門—<人間科学>のための方法論，春秋社，2002，p93-94)。
- 15) Strauss A，Corbin J：Basics of Qualitative Research—Grounded Theory Procedure and Techniques，2nd ed，Sage Pub Inc，1998 (南裕子監修，操 華子，森岡崇訳：質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順，第2版，医学書院，2004，pp18-20)。